

# 棚田学会通信

第24号 2008年2月29日  
 発行/棚田学会  
 〒184-8577 東京都小金井市本町 6-5-3  
 (ふるさときやらばん内)  
 TEL:042-381-6721 FAX:042-383-8614



長崎県雲仙市清水棚田  
 (2000年よりヒサカキ畑に転作)

◆巻頭言.....2  
 清水棚田の石積みと清流.....長崎県雲仙市長 奥村 慎太郎

◆会員通信.....3  
 棚田振興議員連盟の活動～法整備・支援策など～.....衆議院議員 西 博義  
 第15回棚田学会談話会に参加して.....早大非常勤講師 丹藤 佳紀  
 棚田のふるさと.....埼玉県新座市在住 棚田 容夫

◆日本の棚田百選紹介.....6  
 よこね田んぼ(長野県飯田市).....飯田市千代自治振興センター 野口 孝浩

◆官庁ニュース.....7  
 鳥獣被害に対策に新たな法律.....棚田学会理事・全国町村会経済農林部長 牛島 正美

◆書籍紹介.....7  
 「水資源管理と環境保全」:千賀裕太郎著.....棚田学会理事・宇都宮大学 水谷 正一

事務局ニュース

- 現地見学会「和歌山県紀の川流域の棚田」参加者募集
- 棚田学会賞基金募金のお願い
- 棚田学会誌9号への投稿 編集後記

## 巻頭言

### 清水棚田の石積みと清流

～雲仙市で大いに語り合いました～

長崎県雲仙市長 奥村 慎太郎

雲仙岳麓の標高 300m から 400m にあり、他の棚田と比べても均質均衡、整然とした頑強な石積み、清流清水川が流れる岳地区「清水棚田」、先人たちが残した歴史的遺産、また四季折々に絵に描いたようなのどかさや美しい風景を見せるこの棚田を、私たち雲仙市は、平成 17 年 10 月 11 日（永久にいい日）の市町村合併により、貴重な地域資源として旧千々石町から受け継ぎました。

雲仙市は、長崎県島原半島北西部の雲仙普賢岳を取り巻くように位置し、北に有明海、西に橘湾と二つの海に面し、恵まれた気候と肥沃な土壌により、農産、園芸、畜産のバランスのとれた農業が展開し、多様な産地が形成されています。

また、雲仙は古くから霊湯、湯治場として開け、我が国最初の国立公園でもあります。一方、有明海、橘湾の二つの海は、雲仙市を両側から包み込み、海の恵みと優れた景観をもたらしております。本市の基本理念として、「豊かな台地・輝く海とふれあう人々で築くたくましい郷土」を掲げ、地域の特性を最大限に発揮し、新たな地域の魅力を創出する郷土づくりを将来像としています。

棚田は、日本人がいかに勤勉で実直であったか、米づくりに対していかに真摯に向き合ってきたかを物語っています。単にすばらしい景観というだけでなく、日本人の深い精神性、きめ細かい文化性にふれることができ、日々追われる心には、まさに癒しの空間であります。特に「清水棚田」のある岳地区は、棚田の中に家々、集落があり、いまを生きる地区の人々の絆、それを見守る先祖との絆、そして一歩ずつだが未来への歩みがみられるように感じています。この棚田は景観に加え、地域と伝統との絆という意味でも日本の原風景といえると思っております。

この岳地区に一つの転機が訪れたのが、平成 11 年、農林水産省の「日本の棚田百選」に認定されたことでした。先祖伝代の棚田ではありますが、農業近代化とはほど遠く、営農の労苦、農地としての生産性は平地とは比べものになりません。棚田を誇る気持の一方で、不便な土地で続ける農業への疑問と先行きへの不安を抱いている中、そこに百選認定というこ

とで地元が棚田を再認識し、貴重な財産を積極的に活かしていこうと、棚田保全活性化グループ「岳棚田プロジェクト 21」が設立され、棚田を貴重な地域資源として、地域固有の祭りや各種イベント等の交流など地域の魅力を発信する取り組みを積極的に展開してきました。

さて、この岳地区「清水棚田」を有する本市で、平成 20 年 10 月 16 日から 18 日まで三日間、第 14 回全国棚田（千枚田）サミットを長崎市とともに開催することになりました。本市としましても、歴史的遺産である棚田の保全を広くアピールする棚田サミットの開催は、大いに意義のあることと理解しております。共同開催の長崎市は、江戸時代、西洋に唯一開かれた貿易、文化の窓口として栄え、異国情緒豊かな観光都市として有名な地であります。このサミットを、今回長崎市と共に開催できますことをたいへん光栄に感じております。

第 14 回全国棚田（千枚田）サミットは、九州では 5 回目になる日本最西端での開催、雲仙市民の皆さんが棚田サミットの開催をかねてから望み、お待ちしております。

日本全国の棚田地域、棚田農家の方々、棚田を愛する人など大勢が集い、大いに語り合い、人々の心が行き交う素晴らしい棚田サミットとなりますようしっかりと取り組みますので、皆様方のご支援、ご指導を賜りますよう、よろしく願います。

棚田サミットで皆様とお目にかかれることを、心から楽しみにいたしております。



## 会員通信

### 棚田振興議員連盟の活動 ～法律・支援策の整備を推進～

衆議院議員 西 博 義

超党派の国会議員で構成される「棚田振興議員連盟」という組織があります。現在、衆参両院の国会議員78名が加入しており、議連会長には保利耕輔先生にご就任いただいております。

私は発起人代表として議連の設立に携わり、現在、事務局長を務めております。

棚田学会会長の中島先生から和歌山県紀の川市が「棚田」という言葉の起源に関係があるとご紹介いただいておりますが、私は和歌山県の出身です。「棚田」の言葉の起源に関わる和歌山県出身の私が棚田振興議連を立ち上げることとなったことに、何か奇しき縁のようなものを感じております。

さて、棚田振興議連は、国政の立場から棚田の保全に関してさまざまな支援を行う活動をしております。そこで、2004年2月の発足以降、棚田に関わる法律や支援策の整備がどのように行われてきたのか、簡単ですが、ご紹介いたします。

議連発足以前、棚田への国の支援策は、①棚田基金、②中山間地域総合整備事業、③中山間地域等直接支払制度の3つでした。中山間地域等直接支払制度は、その支援策の重要な柱となっておりますが、今後も継続的な実施もしくは恒久化に向けて努力してまいりたいと思います。

議連の発足後、まず行われたのが景観に関する法整備です。

「棚田」は、水資源の涵養、災害の防止に大きく貢献してきました。こうした機能に加えて、近年では、都市と農村との交流の場として観光面での新しい役割が期待されています。さらに、文化的景観としても、その価値が見直されています。こうした新たな視点から、棚田に関する法整備を進めてきました。

まず、2004年5月「改正文化財保護法」、同年6月「景観法」が成立しました。

改正文化財保護法により、新たに文化的景観が保護の対象となり、景観法で整備される棚田や里山の中でも、重要な文化的景観を選び、支援していくことになりました。

景観法では、農山漁村地域に特有の良好な景観を形成すべく計画をつくり、「美しいむら」の実現を目

指しています。

2006年6月には、戦後最大といわれた農政改革が行われ、2007年4月から「品目横断的経営安定対策」など農政改革3対策が実施されています。

その中で、「農地・水・環境保全向上対策」は、農地・農業用水などの生産資源を良好に保全するために、地域の共同活動について支援することとなっています。当然、棚田の保全活動も支援の対象となります。

現在、新たな生活スタイルを実現する場として、「団塊世代」を中心とした農山漁村への定住等を希望する都市住民が増加しております。また、棚田保全活動も多くの都会に暮らす人々に支えられています。

こうした新しい動き等を踏まえながら、棚田保全にも資する政策を検討してまいりました。

その結果が、2007年5月に成立した「農山漁村の活性化のための定住等及び地域間交流の促進に関する法律」です。

この法律は、田舎暮らしを応援する法律で、都会からの移住受け入れや都会と農村の地域間交流を盛んにするための市町村が作る計画に対して、国が「農山漁村活性化プロジェクト支援交付金」を出して支援するものです。

また、2008年度予算案には、「農林漁村地域力発掘支援モデル事業」が盛り込まれていますが、これは、地域住民とNPO等が協働して、伝統文化など地域資源を活用する地域づくりを支援する事業です。地域資源には棚田も該当します。

このように、景観整備の枠組み、共同活動への財政支援、さらに、人的交流の促進など、棚田に関わる法律や支援策が少しずつ充実してきております。棚田を保全するために、今後とも全力で取り組んでまいりたいと思います。



## 第15回棚田学会談話会に 参加して

早大非常勤講師 丹藤 佳紀

旧冬12月8日、棚田学会談話会に参加し、大学の級友・高木宏明さん(元三井物産食糧部門穀物部長)の講演「激変 食の環境、海上運賃の高騰など」を聞いた。

メールで知らせてもらった演題と、副題「元商社マンの視点から最近の食品値上げラッシュの背景をみる」に惹かれたからだ。会場が非常勤で週3日出講する早稲田大学だということで腰が軽くなった。

いまひとつ、演題と副題に関心を寄せた理由がある。日本より一足早く中国で食品価格の上昇が伝えられていたことである。

「肉」といえば中国では豚肉を意味する(面白いことに、韓国では「肉」はふつう牛肉だ)。それほど重要な豚肉の価格が一昨年から上昇し始めていたのである。

昨年、そこに小麦、トウモロコシなど穀物類の値上がり加わり、消費者物価の上昇率が8月には前年同月比で6%を超えた。それが11月まで4ヶ月連続となったのである。公式統計の6%超は市民の実感では2、3割高になっていたことだろう。

そんな中で、中国のテレビが報道した「段ボール紙入り肉まん」事件は、日本でもさまざまな食品の「偽」が問題になっただけに話題になった。

あのテレビ報道は、肝腎の肉まん製造自体が「やらせ」だったとして後にディレクターが処罰され、番組は取り消された。しかし、1年で2倍近い豚肉価格の急騰を考えると、筆者などいかにもありそうなことだ、と思ったものである。

さて、高木さんの講演で感じたこと。

講演の内容は、時間的な縦の流れ(過去・現在・未来)と横の地域的広がり(穀物大国・米国、需要急増の中国・インド、輸入依存の日本など)によって組み立てられている。

講師の意図したことは異なるかもしれないが、筆者が一番強く印象付けられたのは、穀物の生産・輸送における米国の優位であった。水路に恵まれている立地条件などいくつかのポイントは知っていたが、世界の4%の人口で21%ものシェアを持つという構造的な説明を聞くと、その迫力は圧倒的なものになる。

逆に、それとの対比で、わが日本が食糧の生産と消費の両面でたいへん深刻で大きな問題を抱えていることを改めて知らされた。

窮状というべきその在り様は、高木さんの取り上

げたいいくつかのトピックでたちまち明らかになる。総合的な食糧自給率の低下、減反・耕作放棄の増加、飽食グルメ謳歌の陰で増大する食品廃棄などなど。

偉そうなことは言えないが、こうした状況についての啓蒙が足らず、一般によく認識されていないのではないか。この正月、ふだんテレビを見ない筆者の目に飛び込んで来た番組のひとつが、2000グラムのビーフステーキとか4キログラムのハンバーガーを食べ切れるかという「大食番組」だった。こんな風に、視聴率が取ればという商業主義丸出しの番組作りが横行し、その素材に食べ物が使われているのは問題だと思う。

田舎育ちの筆者は、「米」は八十八回手をかけてできるもの、と教えられた。私たちの日本は、山紫水明、国土は広くはないものの他国との比較で言えば自然条件は恵まれている点が多いといえる。われわれが取り戻すべきものは新しい【勤労×自然利用】の精神と技術ではないだろうか。



(撮影：今井 英輔)

## 『棚田』のふるさと

埼玉県新座市在住 棚田 容夫

棚田学会の会員の中で名字として「棚田」を名乗る者は私一人である。お陰様で、石井・木村・中島の歴代会長をはじめ学者の先生方や会員の皆さんに直ぐ面識をいただくご利益に与っている。棚田は全国各地に点在しているのに「棚田」を名字とする者は稀であり、発祥の地である私の郷里のこと、名字の由来等について記することとしたい。

私の郷里は棚田百選の「よこね田んぼ」から北西20km、長野県飯田市中心部から4km北東の座光寺地区（昭和31年合併前は村）にある。この地は、いわゆる伊那谷の天龍川西岸の河岸段丘上にあり、西は木曾山脈系の山地から南東は天龍川の岸边まで、標高700～400mの間に複雑な地殻変動により形成された三つの段丘涯を含み、東高西低の緩やかな傾斜の上・中・下の細長い三段丘を形成し、村境を北の南大島川、南の土曾川が谷を刻み山麓扇状地を造っている。

この地は縄文・弥生時代の遺跡、古墳・奈良時代の古墳も多く、75基（現存24基）が数えられ、奈良時代には「伊那郡衛」が置かれて「麻績郷」と称され、当地方の中心であった。

さて、私の郷里の所在地は段丘中段、字「下羽場」、標高410mの崖線に近い平坦な地にあり、段丘崖下では清水を湧出し、古くから住居に適した地であった。標高410mと420mの二つの段丘崖線間の緩やかな傾斜地に大沢井から分水し「棚田井」が導入され、大小数筆の地籍「棚田」が連なっている。「棚田井7反歩井仲間4人」と井水調べに記録されている。

村史によれば、名字の「棚田」の初見は慶応2年（1866年）であるが、公式には明治4年（1871年）4月制定（翌年5月施行）の戸籍法に基づき、6月戸籍調査、翌年5月統一戸籍調査（王申戸籍）による。

「座光寺村番付覚（屋敷番号）」に44番棚田小平太（高祖父）が記録されている。当時家持ち213軒、借地借家の者39軒、合計252軒（人口1438人）、このうち棚田姓は14軒で、段丘の中・下段に集中している。

「小平太」は代々襲名された。古い記録では天明3年（1783年）「飢饉につき紙漉休業願出11名連名」、天明6年（1786年）「浅間大焼につき村々へ人足割当」11名のうち「下羽場の小平太」が見える。墓石に刻まれた年号は17世紀後半のものもあり、宝永2年（1705年）「下羽場庚申塔」建立の頃には当地に住居を定めていたと考えられる。

天龍川と村境の両河川は氾濫・洪水を繰返し、田畑を流失させた。文化文政期以来10回以上の川除・堤防の普請、流失田の復田と新田開発が併行して進められ、当村川原地区の新田開発は総計47町5畝に及んだ。私の生家は新田開発の進行とともに次第に田畑を拡張し、米作を主に、時に応じて紙漉・養蚕・蚕種などを兼営して、明治末期には在村自作農地主として村内最有力層の地位を築くに至る。

○寛文6年（1666年）座光寺村総検地 田66.4町畑52.9町（分米各930.7 608.9石）計119.3町（分米1,539.6石）

○明治14年（1881年）当村米作面積145.7町 収穫高2,632石 反当1石291

○昭和21年（1946年）当村農地状況 田138.4町畑217.8町 計256.2町

「名字は地名から作られる」「名字は人とともに動く地名である」といわれ、地名から発祥した名字が全体の70%、名字に因み付けられた地名が20%といわれている。棚田は現在も地籍地名として残されており、わが名字は地籍地名から転化したものと推定される。全国各地に所在する多くの棚田から発祥した名字としての「棚田」が稀なのは何故か不明であり、事例があれば御教示をお願いする次第である。



四谷千枚田（愛知県新城市）にて

## 日本の棚田百選紹介

### よこね田んぼ（長野県飯田市）

飯田市千代自治振興センター 野口 孝浩

緑豊かな南信州の飯田市千代地区（芋平・野池地籍）に、「よこね田んぼ」は存在します。面積は3ha110枚（内1ha45枚をよこね田んぼ保全委員会で管理）と、他の棚田と比べても小規模の棚田です。

『よこね』の由来ですが、早稲田大学中島峰広教授は、田んぼの形が横に長く曲がりくねっていたことから『横畝田んぼ』と言われ、そこからではないかと。また、地元のある方は、農作業中に横になって寝てしまったから『横寝田んぼ』など様々な説がありますが、現在は平仮名で『よこね』と統一して呼んでいます。

よこね田んぼが開発されたのは、近世（戦国～江戸時代）とされています。古来より千代地区は耕作に熱心な土地柄でした。また、よこね田んぼ周辺では家畜の飼育も行っており、昔は肥料や家畜の餌が買えなかったため畦畔の草を使っていたそうです。逸話として、「上から見下ろし田数を数えたら一枚足りない。もう一度数えようと槍笠を手に取れば、その下から一枚の田んぼが出てきた」と、まさしく「千枚田」と言えるほどの棚田であったそうです。

その後、よこね田んぼにも荒廃していた時がありました。原因は農家の高齢化。棚田一枚の平均面積が2.7a程で、機械の導入もままならず、高齢者には大きな負担となる手作業が強いられました。また近年の効率性・生産性を追求した大規模農業の枠から外れ、耕作放棄が増えていきました。

このような状況に危機感を募らせた千代地区自治協議会（現まちづくり委員会）などが、棚田を千代地区の財産として位置付け、文化的遺産を後世に受け継いでいくことを検討し、保全活動の原点がスタートしました。保全活動を進める上で地権者との話し合いを繰り返し、また他地区の棚田へ視察等も行い、「あくまでも田んぼは地権者のものであり、形もそのまま残す。借り受け作付け、管理は責任を持って行う」と方針を決め、平成10年2月に地域内発的団体『よこね田んぼ保全委員会』が発足しました。

本格的な保全活動の第一歩として、平成10年度は20枚の棚田の整備を開始しました。長年荒廃していたため、草だけでなく、藤つるや木の根が茂った状態の中、草刈り・田起こしを行い、復田の準備を整えました。翌11年度は試験的に米作りを行いました。畦作りは、ワーキングホリデーの参加者に。田植え

は、地元の中学校と交流のあった千葉県の中学生に。秋の収穫には、地元小中学生が参加をして行われました。収穫されたお米を用いて棚田百選認定の祝賀式を兼ねた収穫祭が行われました。その後も12、13年度と整備を行い、現在の45枚を復田することが出来ました。

よこね田んぼは、当初より昔ながらの手作業による農作業を体験プログラムとして行っており、畦作り、田植え、稲刈り、はざかけなどに加え、案山子作りなども行い、地元の保育園児・小中学生・企業等に限らず、県外の体験修学旅行生などの受入も活発に行っています。

その活動を支えているのが『よこね田んぼ保全委員会』。現在120人の地元有志と30人の地区外ボランティアによって運営されています。地元の方は、各区の現役区長は勿論、区長を引退された方にも携わって頂き、草刈りや水の管理など棚田管理全般の他、田植え・稲刈りなど体験プログラムの指導も行っています。また、地区外ボランティアの方は、都合の良い時に保全活動を行い、春・秋は農作業後の懇親会で地元の方と親睦を深め楽しく保全活動を行っています。

「よこね田んぼ」では、人間が生きる上で大切な食料を作る現場を子供達に再確認させ、他の命をいただき、自分が生かされているということを学び、食べ物を大事にして欲しいという願いを託し、体験プログラムを行っています。また、地元保育園児も農作業体験やどろんこ遊びに興じながら、幼い頃より棚田の自然や千代の緑の豊かさに触れています。

よこね田んぼの保全活動は、単に景観保全だけではありません。大人から子供、そして地区外の方が共に汗を流して作業し、泥まみれになりながらよこね田んぼに携わり、親しみ・語り合い・喜び合うと言った「感動を共感できる場所」として活動しています。

この保全活動を長期的に行い、千代の文化遺産として後世に伝えていくことができるよう、地区民が一体となり今後も努めていきたいと考えております。



## 官庁ニュース

### 鳥獣害対策に新たな法律

棚田学会理事 全国町村会経済農林部長

牛島 正美

昨年12月14日の参議院本会議で「鳥獣による農林水産業等に係る被害の防止のための特別措置に関する法律（略称；鳥獣被害防止特措法）」が可決・成立し、12月21日に公布されました。2ヵ月以内に施行される予定です。

この法律は、イノシシなどの野生鳥獣による被害の実態を把握し、対策に苦慮している市町村が主体的に被害防止に取り組み、迅速で効果的な対応ができるようにすることがねらいです。

野生鳥獣は、豊かな自然環境の象徴でもありますが、増え過ぎて、農林漁業被害や人身被害、さらには地域の生態系に悪影響をもたらすものもいます。

近年、特定の野生鳥獣の生息分布が急速に拡大しており、環境省の調査によれば、分布域はこの四半世紀にシカは1.7倍、イノシシ1.3倍、サル1.5倍、クマ1.2倍に拡大しています。そしてその生息数も急激に増加していると推測されています。

この結果、農山漁村では、鳥獣による農林漁業被害が非常に深刻化・広域化しており、直接的に被害額として数字に表れているだけでも、農業で毎年200億円に達しています。そしてこのことが農家の営農意欲を喪失させ、高齢者の生きがいで奪うような事態を招いており、さらに、人身被害も発生するなど住民の暮らしが脅かされるような状況にもあり、農山漁村の過疎化を一層加速する一因ともなっています。

もちろん、被害市町村においては、これまでも電気柵や防護柵の設置、捕獲わなの設置など種々の対策を講じていますが、現実問題として、対策にはかなりの労力や経費を要し、しかも過疎化・高齢化による人手不足や自治体の財政難、加えて、鳥獣保護法のもとでの制約もあって十分な成果をあげることができず、根本的な対策とはなっていないのが実情です。

こうした状況から全国の農山村の市町村からは、深刻化する鳥獣被害の防止に対する対策の抜本的強化を求める声が高く、自民党では、このための特別措置法の制定を目指して専門の検討チームを昨年3月に設置し、関係各省の出席を求め12回にわたる検討会と6回に及ぶ現地調査を行い、昨年11月に法

案をとりまとめました。そして、与野党協議調整のうへ、議員立法として臨時国会に提出され、このたび成立をみたところです。

この法律の主な内容は、①農林水産大臣が鳥獣被害防止のための施策の基本方針を策定する。②それに基づき「被害防止計画」を策定した市町村に、都道府県が持っている鳥獣捕獲の許可権限を委譲するとともに、同計画に被害防止対策や捕獲鳥獣の処理方法なども盛り込む。③市町村が鳥獣被害対策実施隊を設置し、民間人も非常勤の公務員とし、隊員には、狩猟税を軽減する。④施策の円滑な実施を支援するため、地方交付税の拡充、補助事業による支援などの財政上の措置を講ずる、などが柱となっています。

筆者の勤務する全国町村会では、鳥獣被害対策に係る特別措置法の早期制定と財政措置の充実・強化について、これまで政府・国会に対して強く働きかけてきましたが、関係の国会議員や省庁の理解と協力により、今般、法律が制定されるとともに、財政支援措置も大幅に拡充されました。関係の方々のご尽力に棚田学会の一員として皆様とともに深く感謝したいと思います。

## 書籍紹介

千賀 裕太郎 著

「水資源管理と環境保全」

鹿島出版会（本体 2800円＋税）  
SBN-978-4-306-02393-2

水谷 正一

棚田学会会員の皆さんは、本学会の理事であり農村計画分野で数々の優れた研究を発表してきた著者が水に関する本を著したことに、意表をつかれた思いをしたのではなからうか。実は知る人ぞ知る、著者・千賀さんの研究者としてのルーツは“水”にあり、「水資源のソフトサイエンス」（鹿島出版会、1989年）からわかるように、20年ほど前に工学・統計学・経済学などの科学的なメスを駆使して現代水資源の管理問題を解きほぐし、最先端の学問分野を切り開いた人である。本書は、そうした前著の姉妹編ともいえるべきもので、前著のエッセンスを分かりやすく再整理して理論的な精密化と応用的な展開（第1章と第2章）をはかりながら、前著で予約的に提示していた課題、すなわち河川の環境保全に関する新たな章（第3章と第4章）を起し、さらに水危機の時代といわれる21世紀に必要な水資源管理について、序章と終章で“流域マネジメント”をキーワードに

解き明かすという6章建ての内容になっている。そこで、以下では興味をひかれた内容について、やや詳しく紹介しよう。

第1章では、水資源の特性をどう把握すべきかが論じられている。よく言われる希少性、循環性、偏在性、不規則変動性などといった水資源の自然的特性は通俗的な理解であり、もちろんこの特性も大切だが、むしろ著者は水資源の「社会的特性」を重視し、土地の生産物であるという側面（供給サイド）と利用配分における調整財としての側面（流通サイド）を強調する。土地生産物としての水資源は、その価格形成において限界値の生産費に支配されるという経済的性格をもち、それが水資源の市場価格を規定する。しかし、こうした価格メカニズムは、確率的に発生が避けられない渇水時には通用せず、利害関係者の介入によって配分を調整せざるを得ない「調整財」に化すと指摘する。そして第2章において、渇水時に調整財たる水資源をどのように管理・運用するのかが展開されている。この章で秀逸なのは、単独の利水ダムから始まって多目的ダム、さらに複数ダムの運用計画を明らかにしている点だろう。とくに近年、利根川水系などで複数ダムの統合管理が実施されていることを考えると、ここに提示された方法を実践的に活用することが期待される。

河川環境の保全に関する第3章・第4章でとくに目を惹いたのは、矢作川水質保全対策協議会とグラウンドワーク・三島の事例紹介である。前者では流

域自治の実現可能性を見つめ、後者では地域主体（住民・企業・行政のパートナーシップ）の形成とその相乗効果に注目している。それぞれに共通しているのは内発的な発展力の力強さであり、著者の流域マネジメントへの視角を知る上でも興味深い事例といえよう。

さて、終章では水資源管理の目標理念として公平性、効率性、持続性をあげ、現代コモズとしての流域マネジメントを9つの視点から論じている。そして、流域上下流の農村・都市間の連携で流域マネジメントの成熟をはかりながら、水のみならず食料・エネルギーの自給・補完型の経済運営に発展してゆくことが、21世紀流域マネジメントの究極の姿ではないかと問うている。

本書は文理融合型の教育システムに応えるべく編まれた講義テキストである。そうした視点でとらえ直すと、章末や節末に受講生が学習内容を確認・点検できるような「設問」があっても良かったのではないかと（とくに第2章）。また、語句の正確な説明（例えば、ヴァーチャル・ウォーター、自給・補完型の経済運営など）もやや不足しているように思われた。そうした改善点は改版の際に考慮していただくこととして、当初の文理融合型テキストとしての目論見が十分果たされた内容となっている。教科書としての利用のみならず、現代の水資源問題に関心ある方々にも、是非一読を勧めたい書籍である。

棚田学会理事 宇都宮大学農学部

## 事務局ニュース

### 第18回棚田学会シンポジウム・現地見学会ご案内

#### 『棚田のルーツをさぐる

##### ～紀の川流域の棚田「発祥」地を訪ねて～

日時：2008年5月24日（土）、25日（日）  
 集合：5月24日（土）11:00 JR 阪和線・日根野駅  
 解散：5月25日（日）16:00 JR 阪和線・日根野駅  
 参加費：20,000円程度（宿泊代・懇親会費含む）

#### 5月24日（土）13:30～：粉河ふるさとセンター

##### ■シンポジウム

##### 「棚田のルーツをさぐる

##### —文化財としての棚田—」（仮題）

- ・基調講演：海老澤衷（棚田学会理事/早稲田大学教授）  
「棚田発祥地としての紀の川流域」
- ・パネルディスカッション

##### 「棚田のルーツをさぐる」（仮題）

コーディネーター/田中卓二（紀の川市農林商工部）  
 パネリスト/海老澤衷・高木徳郎（和歌山県立博物館）他

##### ■粉河寺見学～懇親会

#### 5月25日（日）9:30～：現地見学（かつらぎ町周辺）

★

棚田学会賞基金は随時受け付けております。  
 宜しくお申し込み申し上げます。

1. 募金額 1口5,000円（1口以上）
2. 募金方法 郵便振替用紙に「棚田学会賞基金」とご記入の上ご送金下さい。
3. 口座番号 00150-2-125247

棚田学会

★★

棚田学会誌9号への投稿を募集しております。  
 詳細は別紙のとおりですので、ふるってご応募ください。

★★★

編集後記：今回は、異色のお二方、国会議員の西博義さんと新座市在住の棚田容夫さんから寄稿をいただいた。西さんの棚田振興議員連盟の活動について、また棚田さんの名字の由来についての興味深い話題提供に感謝。丹藤佳紀さんの談話会記事はかつて商社マンとして活躍した高木宏明さんの講演内容の紹介である。今後も学会の財産、はば広い分野の多士済済の会員から原稿を募っていきたい。ご協力を乞う。（中島）